

医学用語辞典

日本医学会 編
医学用語委員会



南山堂

序

医学用語統一の問題は、学術進歩の根本的な課題の一つである。かつては解剖学における用語と内科における用語とが違っていたというようなこともあって、種々の混乱をきたした。戦時中からこの問題が日本医学会で正式に取り上げられたことは、きわめて意義あることであった。

日本医学の独立という問題を考えるとき、用語の統一の問題は、その第一に着手すべき問題であった。医学用語は何ととっても長い時間をかけてつくられた。そのつくられた原因については、いろいろな創意くふうがあったと思われる。それらを考えながら新しい時代の人々に向かって理解をすすめることは、たいへん困難な仕事であった。

私が昭和25年田宮会長のもとで副会長をしていた当時から、この問題は大きな努力の一つになっていた。このような重要な仕事を長年月かけて行なったことは、日本医師会と日本医学会とが合同して、きわめて長期的な努力をしなければできない仕事が完成したという大きな誇りでもあると思う。この問題について、小林芳人日本医学会会長はじめ多くの方々が、たゆまざる努力と学会間の連絡を緊密にして、ついにこの難事を完成されたことを、私は心から喜びとするものである。

この辞典が活用され、広く医学関係者を裨益することを念じてやまない。

1975年2月

日本医師会長 武 見 太 郎

まえがき

日本医学会医学用語委員会編「医学用語辞典」が、ようやく完成をみることとなった。膨大な医学用語が、秩序をもたず乱雑に使用されたならば、大きな混乱を招くことは明らかである。

われわれが今日用いている医学用語は、幕末以来、西洋医学の輸入にあたり、当時の医学者が、その豊富な知識にもとづき、漢語ややまと言葉を駆使してこれを訳し、ときには新しい文字を創製してその必要を充たしたのであって、その大きな苦心の跡は、今日のわれわれによく認識できるのである。

医学の進歩とともに、その必要な用語は、ますます数を加え、複雑化していくのであって、医学の各専門分野が、なんの連絡もなしに各々別々の用語を使用すれば、いかなる結果を招くかは、いうまでもないことである。

このことが指摘されて、医学用語整理の試みが行なわれたのは大変に古く、昭和7、8年ころのことであった。日本医学会がこれを正式に取り上げ、委員会を設けて、この整理の仕事にとりかかったのは、昭和15年の第11回日本医学会総会（東京）以来のことである。

それ以来、ここに完成をみるまでの長い期間、やむをえない事情で中絶していた時期を除いて、用語整理委員は実に根気よくこの仕事に従事した。

これは混乱をきわめた言葉の整理の重要性を、委員各位が身をもって痛感していたことによるのであると思う。この仕事にあたって委員会が当面した困難さは、日本語の乱雑さであった。これは医学関係だけの問題ではないので、この乱雑さが医学用語にもある程度反映しているのも止むをえないことである。

整理の対象となった用語は、主として医学のいくつかの分科で用いられるものであって、特定の専門用語は除いてある。使用する漢字はなるべくやさしいものを選び、目によらず耳からも誤りなく理解しうる字をとることに気を配ったが、これも日本語そのものの制約があって、必ずしも十分には行なわ

れなかった。同一の外国語または同一の事象に対して、別々の用語を用いている医学各専門分科間の調整には最も時間を要し、困難な仕事であった。

このように長い時間をかけて用語整理をやってみて、とくに感じることは言葉は生きているということである。たえず代謝が行なわれ、すでに死語となっているものもできるし、新しく生まれる用語も続々出てくるのである。したがって今後、本辞典を利用される方々からの種々の意見を集めて、日本医学会として定期的に訂正追加を行ない、たえず更新を図っていくことが、ぜひ必要であると考えている。

日本医学会が日本医師会に合流して以後、この仕事に要する費用は、全額日本医師会に負担をかけた。ただ短い期間、文部省の学術奨励審議会学術用語分科会から一部の費用をもらった。

長い期間の本事業の推移を書き残すために、医学用語委員会の沿革という項を設けた。これでみられるように、関係された委員の方々の数は非常に多く、すでに故人になられた方々も数多く見出されるのである。これら多数の方々の尽力が集結して、西洋医学が伝来して以来、公式のものとして総合された医学用語辞典が、今日はいじめてここに完成をみたのであって、ここに厚い感謝の言葉とともに、このことを長く記念したいと思う。

1975年2月24日

日本医学会長 小林芳人

医学用語委員会の沿革

昭和15年第11回日本医学会総会の際、長与又郎会頭の提唱によって、医学用語整理委員会が発足し、各分科会から各1名の連絡委員が推せんされた。昭和15年3月の初めての連絡委員会において、この委員会とは別に、実行機関として医学用語整理委員会が設けられることになった。委員長に木下正中委員が推された。整理委員会は委員出席差し支えの場合の代行者として責任ある代員1名ずつを選出することとした。これら委員の氏名を次に列記する。

(氏名の活字は現代常用の活字に統一した)

医学用語整理委員会委員

木下正中(委員長)	東 竜太郎	碓 居 竜 太	緒 方 知三郎
緒 方 富雄	太 田 正雄	大 槻 菊 男	小田島 祥吉
柿 内 三郎	川 上 理一	加 藤 正 吉	金 森 虎 男
栗 山 重信	斎 藤 玉 男	下 瀬 謙太郎	庄 司 義 治
田 宮 猛雄	竹 内 松次郎	高 木 憲 次	高 峰 博
戸 塚 武彦	長 尾 五 一	西 成 甫 次	広 瀬 涉
樋 口 助 弘	古 畑 種 基	宮 川 米 次	三 沢 敬 義
望 月 周三郎	山 岡 克 巳		

医学用語連絡委員会委員

東 竜太郎	碓 居 竜 太	内 山 圭 梧	緒 方 知三郎
太 田 正雄	大 槻 菊 男	小田島 祥吉	柿 内 三郎
川 上 理一	加 藤 正 吉	川 島 震 一	木 下 正 中
庄 司 義 治	竹 内 松次郎	高 木 憲 次	詫 摩 武 人
高 峰 博	田 沢 鍬 二 倫	戸 塚 武彦	長 尾 五 一
萩 原 兼 文	林 道 種 基	樋 口 助 弘	広 瀬 涉
平 松 壽 平	古 畑 種 基	真 下 俊 一	松 本 信 一
松 尾 巖	宮 川 米 次	三 沢 敬 義	望 月 周三郎

医学用語整理委員会委員代員

秋 元 波留夫	飯 野 三 郎	市 川 篤 二	碓 居 竜 太
緒 方 富雄	大 磯 敏 雄	勝 木 新 正	桐 沢 伯 重
熊 谷 洋 保	小 林 方 一	後 藤 正 真	佐 関 覚 二
佐 野 保 人	四 川 清 文	渡 谷 繁 正	角 尾 松 濤
詫 摩 武 敏	立 萩 原 兼	都 築 林 恒	平 松 濤 平
長谷川 敏 一	秋 福 田 邦	藤 田 恒太郎	星 子 直 行

正 木 信 夫 増 山 元三郎 松 田 勝 一 松 村 竜 雄
松 本 本 松 村 上 倫 吉

昭和18年1月に第一次医学用語集の一部がまとまり、印刷公表された。しかし第二次世界大戦のため、この仕事は継続不可能となり中絶された。

昭和27年10月にいって、日本医学会（田宮猛雄会長）に、日本医学会医学用語委員会が新しく組織された。緒方富雄委員が委員長に推されて、用語整理の仕事が進められるようになった。それによって第一次選定用語の改訂と追加等、約16,000語の整理を終り、この整理案が第14回日本医学会総会（昭和30年京都）において各日本医学会分科会に配布された。このときの医学用語整理委員は、文部省の学術奨励審議会学術用語分科審議会の医学用語専門部会の委員をも同時に兼ねることとなっていた。このときの委員の氏名を列記する。

医学用語委員会委員

緒方 富雄*	川島 震一
小川 鼎三*・新島 迪夫*	樫田 良精*
戸塚 武彦*	島崎 敏樹*
松村 義寛*	都築 正男*・羽田野 茂*
原 三郎*	三木威勇治*
三宅 仁*・岡林 篤*	樋口 一成*・九嶋 勝司*
田崎 勇三	庄司 義治*
小宮 悦造*・畔柳 武雄*	西端 驥一*・鈴木 安恒*
工藤正四郎*・秋葉朝一郎*	高橋 吉定*・小嶋 暎一*
小宮 義隆*	市川 篤二*
野田金次郎*	河野 庸雄*・林 一*
松岡 脩吉*	足立 忠*
福田 邦三	稲田 淳
柳 金太郎	安藤駒太郎
三沢 敬義	白井伊三郎
大国晋太郎	佐々 学
平松 壽平*・上田 英雄*	相楽 全
佐々木哲丸*・高津 忠夫*	名取 礼二
内山 圭梧	小野 譲
藤田真之助・久留 幸男・高橋 智広	

* 印：文部省学術奨励審議会 学術用語分科審議会 医学用語専門部会専門委員

・印：同専門部会委員、・印：委員の交代（主査緒方富雄）（同専門部会は*印の専門委員と・印の委員のほか、日本医師会長 田宮猛雄、厚生省統計調査部 渡辺 定を委員に加えて構成された。）

医学用語整理委員

新 島 迪 夫	石 崎 達	宮 本 忠 雄	福 田 雅 俊
阿 南 功 一	若 月 岩 雄	森 崎 直 木	鈴 木 安 恒
春 日 誠 次	芦 沢 正 見	九 嶋 勝 司	広 川 浩 一
菅 野 晴 夫	伊 藤 巖	大 山 信 郎	斎 藤 達 雄
中 島 章	福 山 幸 夫	大 島 祐 之	

この整理は昭和36年までつづけられたが、その後はやむを得ない事情で中絶するにいたった。

昭和40年になって、この事業は、日本医学会（小林芳人会長）の評議員会の決議によって、開始されることとなり、55分科会から各1名ずつの委員を選出し、新しく日本医学会医学用語委員会が発足した。これは昭和41年6月のことであった。

医学用語選定原案（昭和35年12月）18,428語に対し各分科会から、改訂案約4,500語、追加案10,400語が提案された。これらについて各分科会間の意見を調整するため、本委員会は小委員会を作り、さらに少数の整理・専門委員会を作って、仕事の円滑化と簡素化を計った。すなわち、昭和41年6月以来、約60回の小委員会と、昭和43年2月以降、昭和48年の初めまで、100回をこえる整理・専門委員会を開いて試行錯誤的な作業がつづけられ、昭和48年初めに、ようやく整理、調整、編集など、一切の仕事が完了して、組版、校正、それらについての再検討などの作業に移行したのであった。

関係委員の氏名を列記する。

医学用語委員会委員

(医 史 学)	小川 鼎三	(内 分 泌 学)	小山 良修・山本 清
(解 剖 学)	津崎 孝道°	(内 科 学)	上田 英雄°
(生 理 学)	時実 利彦°	(小 児 科 学)	馬場 一雄°
(生 化 学)	松村 義寛°	(伝 染 病 学)	横田万之助
(薬 理 学)	原 三郎°・伊藤 隆太°	(結 核 病 学)	大林 容二
(病 理 学)	大高 裕一°	(消 化 器 病 学)	高橋 忠雄
(癌 学)	太田 邦夫	(循 環 器 学)	樫田 良精°
(血 液 学)	畔柳 武雄°	(精 神 神 經 学)	島崎 敏樹°・赤崎 秀夫°
(細 菌 学)	藤野恒三郎°・川俣 順一°	(外 科 学)	和田 達雄°
(寄 生 虫 学)	森下 薫°	(整 形 外 科 学)	森崎 直木°
(法 医 学)	内藤 道興°・井上 剛°	(産 科 婦 人 科 学)	沢崎 千秋°
(衛 生 学)	北 博正°・西川 潤八°	(眼 科 学)	加藤 謙°
(民 族 衛 生 学)	石河 利寛	(耳 鼻 咽 喉 科 学)	切替 一郎°
(栄 養 食 糧 学)	小池 五郎	(皮 膚 科 学)	小嶋 理一°
(温 泉 気 候 学)	大島 良雄	(泌 尿 器 科 学)	高安 久雄°・赤坂 裕°
(物 理 医 学)		(口 腔 科 学)	林 一°

(医学放射線学) 足立 忠[°]・山下 久雄[°]
 (保険医学) 平尾 正治
 (医科器械学) 榎田 良精
 (解剖学) 義江 義雄
 (公衆衛生学) 山本 幹夫
 (衛生動物学) 加納 六郎
 (交通医学) 岩崎 太郎
 (体力医学) 猪飼 道夫
 (産業衛生学) 松岡 脩吉
 (気管食道科学) 斎藤 成司
 (アレルギー学) 木村 義民
 (化学療法学) 石山 俊次
 (ウイルス学) 川喜田愛郎
 (麻酔学) 稲田 豊

(胸部外科学) 宮本 忍
 (脳神経外科学) 佐野 圭司
 (輸血学) 村上 省三
 (医真菌学) 岩田 和夫
 (農村医学) 野田喜代一
 (糖尿病学) 小坂 樹徳
 (矯正医学) 由比 貞勝
 (神経学) 加瀬 正夫
 (老年医学) 村地 悌二
 (人類遺伝学) 田中 克己[°]

日本医学会長 小林 芳人 (委員長)
 副会長 熊谷 洋
 副会長 大島 研三

[°]印は小委員会委員 ・印は委員の交代

医学用語委員会小委員会委員代員

島 津 浩	岡 田 太 晴	福 井 靖 典	高 橋 博 元
三輪谷 俊 夫	白 石 透	松 井 瑞 夫	橋 本 省 三
柳 沢 謙	宮 本 忠 雄	石 井 哲 夫	野辺地 篤 郎
吉 村 裕 之	武 正 健 一	小松崎 篤	村 井 正 雄
野 崎 貞 彦	石 原 力	広 川 浩 一	古 在 敏 行
伊 藤 巖			

医学用語委員会整理・専門委員会委員

津 崎 孝 道	大 高 裕 一	伊 藤 巖	森 崎 直 木
伊 藤 隆 太	西 川 演 八		

これら委員会には、小林日本医学会長が終始参画し、伊藤隆太委員がたえず幹事役として整理のための準備や企画を行なった。その補助役として本田英輔学士がこれを助け、この事業の庶務一切は日本医師会学術課が担当した。なお、本書の出版にあたっては、終始、南山堂出版部の努力に負うところが大きい。

[1975. 2. 24. 小林芳人 記]

凡 例

I. 選 定 方 針

1. 一般原則

- 1) 医学用語を中心とし、広く歯学、薬学、化学その他の分野における医学に関連をもつ用語をもできるだけ採録し、見出し語約87,800語、同義語約24,500語、計約112,300語に及ぶ。
- 2) 各分科において頻繁に使用される語、重要な語、ないしは一定の系統上必要な用語などを採録したが、その最終的判定は原則として各分科委員に委せたため、その標準は必ずしも一定していない。上掲の類別に当然入るべき語であっても、基本語の組み合わせによって容易に合成語を作り得るもの、人名の冠せられた語、長い用語は必ずしも採録されていない。

本書は医学概念を選択整理したものではなく、その表現に使用される**基本的な語**を選択整理し、これを検索に便利な形式に配列したものである。医学においては基本的用語の組み合わせによる合成語を用いることが多く、本委員会はここに集められたもののみの使用を重要視するのではなく、当然、派生的に生ずる語の使用を期待している。

- 3) 個々の薬品名、物質名は原則として収録せず、これが組み合わせられて医学の術語となっているものは採録した。

2. 調整の原則

- 1) 各分科会およびその後の整理委員会で行なった用語の調整は、以下の原則に則って行なったが、相互の調整がどうしてもつかないときは、当分の間どちらかを用いてもよいこととし、併記、または一方を（ ）内に入れた。
- 2) 一般科学（物理学、化学、生物学、心理学）および隣接領域（歯学、薬学）に由来した用語は、原則としてそれに合わせた。

II. 編 集 方 針

1. 配列と外国語の取り扱い

a. 配列および文字の原則

- 1) 配列は便宜上、対照外国語のABC順によった。ウムラウトやアクセサンなどの有無に関係なく配列した。ドイツ語のcとk, cとzは一方になれば他方を参照されたい。
- 2) 外国語の初語の初字は原則として小文字としたが、英語の固有名詞、ラテン語の生物学名（動植物・細菌・寄生虫の学名）、ドイツ語の名詞は初字を大文字とした。なお、生物学名

のうち紙名はイタリックを、その命名者はスモールキャピタルを用いた。

Ascalis lumbricoides LINNAEUS 回虫

- 3) 原則として見出し語は単数を示し、複数は用いなかったが、併記したものもある。慣例上、複数の表現が行なわれるものはそのまま採用した。

artery, arteria? (arteriae^英, aa.), 動脈

Arterie

os? (ossa^英) 骨

Zotten^英 (villi^英) 絨毛

- 4) 英語の冠詞は省いた。

- 5) ドイツ語の ss と ß との区別をした。

- 6) ドイツ語の綴りのうち III を II とした。

Schall+Leitung を Shalleitung,

b. 語群形成の原則

語原を同じくする語ないしは同義語で語群を形成しうるものは、次の原則に従って語群を形成させた。

- 1) 見出語の多くは英語を中心として、語原的に共通なラテン語、ドイツ語（時にフランス語その他）をこの順に集めた。しかし在米の日本医学を考慮して、ラテ：語・ドイツ語からも引けるように配慮した。フランス語は、わが国でよく使われるものの最少限度にとどめたが、それから引けるようにした。また主として見出し語と語原を異にする同義語は、見出し語の後に（ ）内に入れて挿入し、英、ラ、独、相互の対照の便をはかった。

obesity, obesitas, **Obesität** 肥満^[独]

(adipositas, Beileibigkeit, Fettleibigkeit)

- 2) 同一語が反復して出る場合、初出の綴りを太字とし、あとは頭文字のみで省略した。なお、ドイツ語の形容詞のように活用する場合は、活用語尾のみを省略頭文字の後に付けた。

measles, Masern 麻疹、はしか

abortive m., abortive M. 頓挫性 ——

feverless m., afebrile M. 無熱性 ——

maximal^英, **maximalis**[?] 最大の

m. blood pressure, —— 血圧, 最高血圧

m.er [Blut]druck

m. stimulus, m.er Reiz —— 刺激

- 3) 同一語幹、語尾の省略：語幹、複合語で反復される綴りは、同様 初出のものを太字とし、その後は —— で省略した。同一語尾も同様である。

上記 2), 3) の省略頭文字または —— が、次の段にまたがるときには、省略前の綴りを欄外に太字で記し、検索の便をはかった。

microcolony	マイクロコロニー
—— cornea	小角膜
nystagmus, Nystagmus	眼振
postural n., Lage —	体位〔性〕——
rota[to]ry n., Dreh —	回転——

2. 日本語の取り扱い

a. 日本語そのものの表記

- 1) 3回以上反復する単語は、外国語と同様、初出のものを太字とし、以下反復されたものを原則として——で示した（前記実例参照）。ただし……病のように省略すべき語が1字だけのときは、省略しなかった。

- 2) 1つの外国語に対して、2つ以上の意味の異なる日本語があるものは、；を入れて併記し、それらに対応する別の外国語を（ ）に入れて区別を明らかにした。

Bruch	ヘルニア (hernia, Hernie);
	骨折 (fracture, Fraktur)

- 3) 名詞と形容詞、名詞と動詞が同一の形をとり、これが2項目に分かれた場合は、形容詞を先に、動詞・名詞を後に置いた。

animal , animalis, animal [isch]	動物〔性〕の
a. bite	——咬創
a. function, a.e Funktion	——性機能
animal (Tier)	動物
cold-blooded a.	冷血——
control a.	対照——

- 4) 漢字および送りがなの多くは、文部省国語審議会（昭和48年6月8日告示）のものに従ったが、当用漢字以外でも医学用語で慣用されているもの、および正式ではないが、略字として繁用されているものの使用も認めた。

- a) 当用漢字以外の簡略字体として、嘔（嘔）、灌（灌）、頸（頸）、脛（脛）、瘡（瘡）、喉（喉）、疹（疹）、鼠（鼠）、仍（仍）、撓（撓）、牽（牽）、汙（汙）、瀘（瀘）、彎（彎）、軀（軀）を、強制的ではないが取りあげた。令（齡）、才（歳）はいずれを用いてもよいとした。
- b) 制限漢字や当用漢字音訓表で認められないもの、および難読ないし画数の多いものは、書きかえまたは言いかえを行なった。やむを得ないものはかな書きとし、（ ）内に語原としてその漢字を入れた。

- (1) 漢字の書きかえ： これは原則として、文部省による“用字用語例”にある漢字漢語についての、書きかえ、言いかえの基準（昭和28.11）および国語審議会による“同音の漢字による書きかえ”（昭和31.7）に従った。

- (2) 言いかえの方法： 新聞用語懇談会の言いかえ集（昭和30.1），“新聞用語集”収載を参照した。

(3) かなによる書きかえ方法： 当用漢字表の“使用上の注意事項”および“文部省学術用語選定基準”に、支障ない限り従った。

c) 次のようなものは、ひらがな、漢字いずれでもよいことにした。

うぶ(生)毛, ぜん(蠕)動, せん(鮮), のう(養)

5) 薬, 剤の区別: 「……薬」は, すべての薬物に適用し, 「……剤」は製剤化された形のものに使うことにした。

「薬」という文字は単一の物質を中心として作用がはっきりしている薬物(すなわち作用のある物質)のことをいうこととした。たとえば中枢興奮薬, 抗不整脈薬(下剤は例外)。

「剤」という文字は, それを適用する形(剤形)にしたものをいうことにした。

洗眼剤, 点鼻剤, 外用剤, 内用剤。

6) ひらがな, カタカナの使用

a) 在来からの日本語は, ひらがな(または漢字), 外来語はカタカナを原則とした。

ひつじ, モルモット, ラット, マウス

b) 生物名は, ひらがなとする。ただし, 生物の和名はカタカナで書いてもよい。

ひと, うま, うさぎ, さる, へび, か, くも

c) ただし, 聞いてよくわかり, 書いても短くなるものは, 混乱がおきない限り, 日本語をカタカナ, ひらがなのいずれで書いてもよい。このとき, なるべく名詞をカタカナ, 形容詞をひらがなとしたい。

かいウサギ, ひとタンバク(ヒトたんぱく), ひと血清, うま血色素(うまヘモグロビン), マンソンかぎさなだ

d) 擬音(擬声語)および擬態語はカタカナ書きとした。

ブンブン音, ザクザク便

e) 慣用的な呼び方をしたものに, イタイイタイ病がある。

7) 単独では清音だが, 複合語になって濁音になる単語も, 単独で見出しのときは太字で清音で示したが, その1群の中で, —で示されるときは濁音で書いてよい。

scissors, Schere

iris s.

turbinate s.

monkey

crabeating m.

rheusus m.

はさみ(鋏)

虹彩—

甲介—

さる

かにくい—

あかげ—

を → 虹彩ばさみ(鋏)

を → 甲介ばさみ(鋏)

を → かにくいさる

を → あかげさる

b. 外来語のカタカナ表記

1) 外国語由来のものはカタカナ書きを原則とする(前出)が, 国語化して外来語の意識の薄れたものはひらがなとする。

例: たばこ

- 2) 外来語の表記は、原則として第20回国語審議会報告の“外来語の表記”(昭和29.3)に従った。

c. 固有名詞、人名の表記

- 1) 人名を付した用語では、人名の読み方と内容不明のことがおきる。そのため内容を表現した通常の医学用語があるものは、それに置きかえ、人名の付いた用語は、() 内へ入れた。そのほか人名の付くものは、ローマ字でそのまま書くか、慣用的なものはカタカナで書いてもよい。

Wilms' tumor	胎生性腎混合腫瘍(ウィルムス腫瘍) を Wilms 腫、ウィルムス腫 のように
Wassermann's reaction	梅毒血清反応(ワッセルマン反応) を Wassermann 反応、ワッセルマン反応 のように
Prießnitzumschlag	冷湿布(ブリースニッツ湿布)
Babinski's reflex	母趾反射(バビンスキー反射)

これが長すぎるときは、省略してバビンスキー反射、Babinski 反射と書いてもよい。また、人名の次に氏を入れない。

- 2) 細菌および寄生虫に人名を付けたものや、他の固有名詞たとえば地名は、そのまま使用した。

<i>Clostridium welchii</i>	Welch(ウェルシュ)菌
Merseburg triad	メルゼブルグ[市]三症候

d. 数字の表記法

現在のところ、数字の表記には混乱がみられる。しかし、横書きにおいては、数字はできるだけアラビア数字を用いることにした。ただし、数の概念から離れて1つの言葉となったものは、漢数字で書く。

個々については、なるべく“出版技術入門”(日本印刷新聞社)に従ったが、慣行的になっているものは、どちらを使ってもかまわないことにした。

漢字で書くもの： 十二指腸、百日咳、一酸化炭素

いずれでもよいとしたもの： 第3(Ⅲ)因子、第2(Ⅱ)誘導、第4脳室、第4性病、一次、二価、三日熱、……など(ただし、記載は多くは一方のみとした)。

3. 略 字

EEG, BCG, SMON のように一般化した略字はそのまま使ってよい。

EEG=electroencephalogram 脳波(脳電図)
(EEG)

BCG-Impfung BCG 接種
=bacille Calmett Guérin-Impfung

SMON=subacute myelo-optico-neuropathy

スモン、亜急性脊髄視神経障害

4. ギリシャ字

α, β, γ など、そのまま使ってもよい。

alpha amylase を α amylase に
アルファアミラーゼ を α アミラーゼ に

5. 記号

- () 1) 直前の語に代わって使ってよいの意味。
2) 見出語の次の () は同義語または略語を示す。
[] [] カッコ内は省略して用いてもよく、必要に応じて付け加えてもよいの意。
() 訳語の内容の説明など。欧文では命名者も必要に応じて入れた。
, ; , は同義語のくぎりを示す。; は訳語の意味の異なる場合。
—— 1) 類縁語、参考語の意。同義ではないが参考という程度。
2) ……を見よ の意 (参照頁を記入した)。
—— 外国語では語幹・語尾の省略、日本語では同一単語の反復で、いずれも上出の太字の省略を示す。
↔ 反対語

英¹独²仏³伊⁴西⁵ 単 復 それぞれ、英語、ラテン語、ドイツ語、フランス語、イタリア語、スペイン語；および単数、複数を示す。

ただし、^{英¹独²}は occlusion, oclusio, Okklusion のように英、ラ、独の順を守るものには原則として付けず、この順を守らないもので判りにくいものに付けることにし 使用は最少限に止めた。

amputation, amptatio, Amptation	切断；切断術(法)
ear (auris ² , Ohr)	耳、みみ
eczema ^{英¹} , Ekzem, eczéma ^{仏³}	湿疹
edema (oedema ² , Ödem, oedème ^{仏³})	水腫、浮腫

英、独の形容詞に2種あるときは初出は^{英¹}、^{英²}、^{独¹}、^{独²}のごとくし、次出以下は^{1,2}のごとく入れて区別した。

optic^{英¹}, optical^{英²}, opticus², optisch^{独¹}	眼の、視覚の
o ¹ . axis, o.e Achse	光学軸、眼球軸； 視軸(axis opticus, Sehachse)
o ² . center, o.es Zentrum	視覚中枢
malignant, malignus ² , malign ^{英¹} , malignös ^{独²}	悪性の
m. degeneration, m.e ² Entartung	——化
m. granuloma, m.es ¹ Granulom	——肉芽腫

A

A-band,	A 帶, 不等方帶 (横紋筋の)
A-fiber	A 線維
abacterial, abakteriell [※]	無菌〔性〕の
abasia, Abasic	失歩, 歩行不能〔症〕
Abbau	分解
— ferment	— 酵素
— pigment	— 色素
— produkt	— 産物
abbinden [※] (ligate)	結紮する
Abbindung (ligature)	結紮
ablassen [※]	退色する
Abblassung (discoloration, Verfärbung)	退色; 蒼白
abdomen [※] ,	腹〔部〕,
Abdomen	はら
(Bauch)	
acute a., akutes A.	急性腹症
distended a.	膨隆腹
(Blähbauch)	
fat a.	脂肪腹
(obese belly, Fettbauch)	
girth of a.	腹围
(Bauchumfang, abdominal circumference)	
navicular a.,	舟状腹
a. naviculare;	(腹部陷凹)
scaphoid a.,	
a. scaphoideum	
(Kahnbauch)	
pendulous a.,	下垂腹,
sagging a.,	懸垂腹
a. pendulum	
(Hängebauch)	
pointed a.,	尖腹
protuberant a.,	
bulging a.	
(Spitzbauch)	

abdominal [※] ,	腹〔部〕の,
abdominalis ⁷	腹〔側〕の
a. angina,	腹部アングナ,
angina abdominalis	— 狭心症
a. aorta,	腹大動脈
aorta abdominalis	
a. apoplexy	腹卒中
a. arterial	— 動脈不全〔症〕
insufficiency	
a. ballotement	— 浮球感
a. breathing,	腹式呼吸
a. respiration,	
Abdominalatmung	
(Bauchatmung)	
a. cavity,	腹腔
Abdominalhöhle	
(cavum abdominis)	
a. cervical cesarean	腹式頸部帯〔王〕
section,	切〔開〕〔術〕
a.er zervikaler	
Kaiserschnitt	
a. cesarean section,	腹式—
a.er Kaiserschnitt	
a. circumference,	腹围
Abdominalumfang	
(girth of abdomen)	
a. decompressor	陣痛緩和器
a. distension,	腹部膨満, 腹部膨隆
Abdominalaufreibung	
a. dropsy	腹水
(ascites, Aszites)	
a. epilepsy,	腹部てんかん
Abdominalepilepsie	
a.e erweiterte	腹式広汎子宮
totale Exstirpation	切除〔術〕
des Uterus	
a. fundal cesarean	— 底部帝〔王〕
section,	切〔開〕〔術〕
a.er fundaler Kaiserschnitt	
a. hysterectomy	— 子宮切除〔術〕
(abdominohysterectomy, laparohysterectomy)	

a. median cesarean 腹式中線帝〔王〕
section, 切〔開〕〔術〕
a. er medianer Kaiserschnitt
a. migraine, 腹性片頭痛
Abdominalmigräne
a. muscle pressure, 腹圧,
a. m. strain, いきみ
Abdominaldruck
(Bauchpresse)
a. m. reflex 腹筋反射
a. nephrectomy 腹式腎切除〔術〕,
(laparonephrectomy) 腹式腎摘〔出〕〔術〕
a. pain 腹痛
(abdominalgia,
celialgia,
Bauchschmerz)
a. paracentesis 腹腔穿刺
(abdominocentesis)
a. pregnancy, 腹腔妊娠
a. e Schwangerschaft,
Abdominalschwangerschaft
(graviditas abdominalis)
a. reflex, 腹壁反射
Abdominalreflex
a. r. center 腹壁反射中枢
a. region, 腹部
Abdominalgegend
a. respiration 腹式呼吸
a. ring 腹輪
a. skin reflex 腹皮反射
a. surgery 腹部外科〔学〕
a. tumor 腹〔部〕腫〔瘤〕
(Bauchtumor)
a. typhus, 腸チフス
typhus abdominalis,
Abdominaltyphus
(typhoid fever)
a. wall 腹壁
(Bauchdecke)
a. w. plasty — 形成術
a. w. reflex — 反射
(Bauchdeckenreflex)
a. window method 腹窓法
(Bauchfenstermethode)
abdominalgia, 腹痛
Abdominalgie

(abdominal pain,
Bauchschmerz)
abdominocentesis 腹腔穿刺
(abdominal paracentesis)
— hysterectomy 腹式子宮切除〔術〕
— hysterotomy 腹式子宮切開〔術〕
— sacral method 腹仙法
— scope — 鏡
(laparoscope)
— scopy — 鏡検査〔法〕
(laparoscopy)
Abdruck 圧痕,
(impression) 印象
anatomischer A. 解剖 —
(anatomical i.)
Fuß — 足 —
Abdruckmasse, 印象材
— material
(i. material)
— nahme 印象採得
(i. taking,
i. making)
abducens nerve, 外転神経
Abduzens
(nervus abducens?)
a. paralysis — 神經麻痺
abduct, abduzieren^m — する
abduction, abduction, 外転
Abduktion
abductor, Abduktor — 筋
↔, adductor
Abduktionsschiene — 副子
— stellung — 位
Abduzenslähmung — 神經麻痺
aberrant^m, 迷入〔性〕の, 異所の;
aberrans? 異常の
a. goiter — 性甲状腺腫
a. mixed tumor 迷入混合腫瘍
a. thyroid — 性(迷入)甲状腺
a. type 異型
aberration, 収差;
aberratio, 迷入;
Aberration 異常
a. lactis^m 異所乳汁分泌
a. of testicle, 睾丸転位
a. testis
→ cryptorchidism